

書 評

村松常雄編著

日 本 人

—文化とパーソナリティの実証的研究—

黎明書房(1962)

本書序文によると、編者は最初精神病理学の問題を社会・文化的条件を考慮にいれて、その意味で新しい、独自の研究をはじめようことを意図され、それを端的に「精神病理学と文化的背景」なる題目で表わされる内容のものであつたという。問題の所在を意識されたのは1933(昭和8)にさかのぼるのであるから、強じんな問題意識を持ちつづけてこられたことがうかがわれ、1951(昭和26)以来10年にわたり、約100名の研究者を動員して調査研究が継続され、結果が大冊の本書となつてまとめられたのは、研究費助成もさることながら、第1に編者におけるこの根深い問題意識のおかげであろうと、まず序文を拝見は始めるや考えたのである。

ところが本書の研究は、日本人の文化とパーソナリティの実証的研究を目指し、その結果の報告である。はじめの編者の問題意識が上に記したとおりであつたことを思うと、問題意識に飛躍があつたことはあきらかであろう。「精神病理学と文化的背景」と「文化像とパーソナリティとの関係」とのそれぞれの題目に意味される問題は方向がちがうからである。その点の記述がなされていないので、せつかく表明された当初の問題意識についての記述の意義がうすれる印象を禁じえなかつた。本研究の目標は「現在の日本人にみられる意識や行動における古き伝統的、因襲的なもの——からの解放のされ方の程度、また日常生活における諸行動、生活態度における近代化、都市化への変化の程度」をあきらかにすることであつた。したがって、この研究は、報告主内容を見てもわかるように、精神病理学自体とは直接の関係はないといえよう。日本人の病態分析に対してこの研究が寄与するであろうと期待がかけられている(P.101)ので、右の関係が志向されているとはいえるし、精神病理学でしばしば用いられるテスト法に依存してはいるけれども。それで、上記序文の記述を思ひかえすときとまどう感じがした。

とまどうというと本論にはいつて早々にもこの種の感じのする個所に出会つた。まず「第1章 問題の提起と基本的諸問題の考え方」においてである。この研究の目標を念頭において通読するとき、そこに詳細にのべられていることがらがこの研究の結果内容とどれほどの必然

的關係があろうかと疑問が生じたのである。つまり木に竹をついだという感じがしたのである。次に、personality in culture, culture in personality, culture and personality, あるいは、「比較文化研究」というような項目についてこそ本書主内容に対する前提として詳論しなければならないと考えられるが、前3者がまとめて1ページ足らず、「比較文化研究」については半ページに充たない記述、「日本人の人間像は果して外国学者が論じているようなものなのか？」の題目に8ページを割いてあるが、題目に妥当することばはその間2行程ずつルース・ベネディクトの「菊と刀」について2回言及しただけである。これは意外なことで、稀に見る共同研究のよきみのりを収めた報告書としてはその点玉にきずと惜しむ思いである。

筆の運びでついはじめにこのような叙述になつてしまつたが、しかし、それより先へすすむと調査実施に慎重さが目立ち、整理・叙述に研究者間の協調ぶりがうかがわれ、ことに共同研究のあり方に関し考えさせられることが多い。調査方法と結果整理とは上記3者のうちの“culture and personality”の形にしたがつたという。という意味は、調査研究は、テスト法の実施、客観的な歴史・社会・生活の調査、両結果の関連性の考察の3つに分けて行ない、本報告書でその結果をそれぞれ第3章第4章、第5章にまとめたということである。第3章、第4章ともに豊富な資料を示しはなはだ興味ぶかい。次に一、二感じたことを記してみよう。

5つの調査地(名古屋、岡山と名倉、新池、佐久島の3村落)における封建性の度合いを知るために92の質問項(14のカテゴリー)を設け、スケール・テストを行なつた結果、調査地ごとに総得点、カテゴリーの点数に差があつた。そのような差が出てくるのはどのような要因によるものか、はたして特定地域、たとえば名古屋に住むことが「得点数を低くさせる要因になつているといえるのかどうか、たとえなつたとしても、他の要因に較べてその重要性はどうであろうか……」と問題を立て、そして右要因として地域、性、学歴、年齢、社会階級の5つをあげている。特定地域に住むこと自体と他の4要因とが得点数に及ぼす作用度の差いかんというこの問題の設定は妥当であろうか。「地域」は4要因に並列される要因と考えることについて問題はないであろうか。むしろ、得点上の地域差がいかような諸条件の結合作用によつてあらわれたのかという問題をこそ立てなければならないと考えられるが、どうであろう。地域は作用要因

というよりは問われるべき対象であろうと思う。この問題を追求してこそ地域別総得点数の意味する内容が理解され、したがって地域別住民の特殊の共通傾向があきらかになるであろう。そうしてはじめて歴史・社会の調査の結果報告のあと「われわれは……名古屋、岡山、佐久島、名倉および新池をとりあげ、その生成・発展の歴史と現状とを概説してきた。そこであきらかにされたように、それぞれの地域社会は、それ自体一つの統合体として、独自の性格をもつものの如くである」(361ページ傍点筆者)とあることに対応して、各地域の住民一般における独自の one whole としての諸傾向があきらかにされると思うのである。じつは「文化とパーソナリティ」研究におけるパーソナリティの捉え方というのはこれであろう。関連して看過されてならないことは、調査地ごとにカテゴリーの得点数に差があつたという上記の場合に2つの型が見られた(それぞれ啓蒙化によるヴァリュエーと慣習に直結したヴァリュエーに依拠して)が、この研究でより重視されねばならないのは慣習に結合した型であろうと思う。この場合啓蒙化によりもたらされた価値判断は、前者に比しパーソナリティの内部への根差しが浅いと考えられるからである。慣習は特定地域に根をおろし、啓蒙化は地域を越えて個人として生じうるからともいえる。啓蒙化を規準にとつては独自の歴史をもつ地域住民の個性は捉えられないと考えられるのである。さてロールシャッハ・テストのところでは地域に代つて「都鄙」なる要因も使われている。これになると少し概念がちがいが、それとしてとりあげてよい要因であろうが、しかし性別、年齢などのように一義的に明瞭性をもつたものとはいえない。ともかくも要因をあげてカテゴリー得点に対するこれら要因の影響度ををはかることに用意周到な努力が払われている。そしてその結果にもとづいて地域別住民の傾向がまとめられている(244~245ページ)先に地域を作用要因にあげてあることに疑問を表明したのであるが、右のような整理のしかたになつていたので、実際は地域は問われる対象になつていたのである。してみると、上記したように地域を作用要因としてあげたことは叙述上の一貫性を損なう結果になつたようである。テスト結果の整理においては右のようであるが、第4章Ⅱの生活実態調査結果の総括(433ページ)のところでは性別、年齢別、学歴別、社会階級別、地域別による比較を試みている。しかしここでは前4者の記述にもとづいて地域性格をあきらかにするというのではないし、ま

た社会階級別、地域別比較は十分意味があるとしてもそれ以外のものによる比較記述を試みる十分な理由が不明である。実際数行の記述にすぎない。ここでも、同章Ⅰで各調査地の社会・文化的独自性を示すことに焦点をつたいき方に準じた方がすつきりしたであろうと思われる。

さて、第5章では先行2章にまとめられた結果の関連について考察する。それは第3章の住民傾向がなぜ形成されたかについて第4章の内容を手がかりにして考えるということであろう。したがってそれははなはだ興味をひかれる報告、重要な考察内容となるはずのものである。しかも、先にのべたことからいえるように、460~465ページの「地域別集団にみられた諸特性の違いについて」の部分が重要な位置を占めるものであろう。そしてこの部分こそ本報告において扇のかなめにあたるところといいたい。しかしながら、この部分作成への精力集中は、右のようなこの部分の位置にふさわしい程度のもではなかつたように思われる。長期、多数者の協力によつてぼう大な資料が得られたうでの右題目に関する考察としては簡に過ぎている。簡略ではあるが、豊富な資料にもとづいたものであるから千鈞の重みがあるとは感ずるが、しかし、この程度ではことに第4章が資料として十分生かされなかつたことになる。

このように考えるのは、「文化とパーソナリティ」研究に関するわたしの考え方にもとづいており、編者その他の関係者の方々が文化とパーソナリティのおのおのについての個別研究のあと附随的に両者の関連を考えることにするという方針であつたとするなら、そのかぎりでは上にのべたわたしのことは当らなかつたことになる。が、しかし、この部分の位置づけを上記したように考えるのがやはり適当なのではなからうか。

最後に一言したいのは、目次のつけ方に実に添わない点があると思つたことを先に記したのであるが、本書の表題についても同じことを感ずる。内容に即していえば「日本の都市・村落における近代化の調査研究」ということにならうと思う。

感じたことを卒直にのべてきたが、読み誤まりがあつたことをおそれる。研究意欲にもえこれほどの成果を得られたことに満腔の敬意を表し、あわせて今後のご発展をおいのりしたい。

(東京大 築島謙三)